

# 「ことば」で育てる

東京高等師範學校教授

石 井 庄 司

これまで、國語教育といえば、學校教育がはじまるまで必要ではないと考えられてきた。したがつて、幼児の教育とは關係のないもの、或は、關係のうすいものというように考えられてきた。しかし國語の教育は、決して文字の教育だけではなく、話し言葉の教育が重要な役割を占めているのである。それでも、言葉の教育は、幼児にはまださして必要でないかもしれない。しかし幼児にも言葉での教育は十分關係がある。それどころか、言葉の教育が行われるより、はるか前に、すでに、言葉での教育は行われている筈である。

たとえば、どこの幼稚園だつて、「ことば」の使われていないところはない筈である。園長先生も保母の方々も、また園児も、一日中黙つているというような幼稚園は、この世には存在しないであらう。「先生、おはよう」と喜び勇んで園児が飛び込んで来る朝から、「さよなら」と言うまで、どこの幼稚園も無邪氣な話し聲に充ち満ちている筈である。こうして、ことばは育つて行く。「ことば」の教育は確かに存在するわけである。「ことば」で育てることは、學校教育の重要な部面であるが、幼稚園が十分その任務を果しているのである。

しかし、これも、決して、幼稚園からはじまつていっているのではなく、家庭教育の中心が全く「ことば」であること、知る人はよく知つていいる筈である。生まれるとすぐ母親は、やさしく腕に愛兒をかゝえ込むと共に、愛撫のことばを投げかける、片言まじりにどころか、まだ一言さえものいうことのできない赤ん坊でも、母親は、十分話を交わすことができる。泣くにつけ、笑うにつけ、起きるにつけ、寝るにつけ、いつでも母親の慈愛のこもつた「ことば」が伴奏として存在するものである。こうして、子供たちは育てられる。「ことば」で育てるといふことは、決して奇妙な言い方でないことは、十分わかかつて戴けることと思ふ。

こゝで中根東里先生の「新瓦」のことを申したい。中根東里先生は、伊豆の下田の人で元祿七年に生れ、明和二年、七十二歳で亡くなつた儒者である。今から凡そ百八十年ばかり前の人である。年十三のとき父に先だたれ、母につかえて孝養をつくしていたが、母の命で僧となり、後、江戸に出て猿蓑や鳩巢などについて學を修めたが、全く普通の者とは違つ

ていた。かつて鎌倉の鶴岡八幡宮の前で、弟と共に下駄を賣つて生活したこともあつた、後には下野國安蘇郡の天明卿に移り開店した。このとき、鎌倉の弟叔徳の娘芳子を引取つて世話をした。芳子は僅かに三才、先生は五十二歳の獨身者であるが、晝夜心根を傾けて、芳子の養育につくした。「新瓦」は芳子四歳のときに書かれたもので、全く感激の深い書物である。

その中にこういうことが書いてある。芳子が下野へ来るまで、鎌倉で世話になつていた隣のお婆さんがあつた。芳子の母はなくなり、父の叔徳はかせぎのために外出することが多いので、隣のお婆さんに頼んだのである。このお婆さんは、父の前では、芳子をよく世話するように見せかけているが、陰では虐待したということが述べてある。その證據というのは、三歳になる芳子が下野へ来たときに、幼言葉といふものを知らない。みんな大人のような言葉遣であるといふことを指摘して居られる。例えば幼児は手といふことは「テ」といわず「テテ」といふ、寝ることは「ネネ」といふ、起きることは「オキオキ」、食物は「ウマウマ」というように重言を使う。また犬は「ワンワン」猫は「ニャーニャー」鼓は「テンテン」尿は「シィシィ」というように聲をそのまま具象的に言う。元來幼児は、こういう愛情のこもつた「ことば」で育てられるものである。ところが今、芳子は隣のお婆さんから愛情を以て世話されなかつたから、こういう幼言葉を知つてゐないという結論なのである。

これは、今日の科學的考え方、或は標準語教育というような方面から考えると、異様に思われるかも知れないが、深い意味のあることと思う。眞の親心の有無ということが問題となるのである。「ことば」の教育ではないが、まことの言語教育の眞理を言い現わしたものと思う。知識階級の家庭では往々にして、行きすぎた「ことば」の教育という點から、幼児に幼言葉を與えず初めから大人の言葉を教え込まうとして、大事な親心を失つた例を見せられる。考うべきことではないかと思う。

アメリカの學校での言語教育は、家庭の言語から入つてゐるといふことを過日進駐軍の方から聞いた。あまりやかましい言葉直しは、兒童の濫刺たる發表の意欲をおさえて、かえつて言語教育には、差支を生ずるといふ話であつた。幼稚園での言語教育は、幼児言葉そのままよく方言でも訛語でもともかく幼児が楽しんで話することに重きを置きたいと思う。それでは幼稚園では、どんな「ことば」でもよいか、特に保姆先生の「ことば」は何でもよいかといふのではない。これは全く、正しく美しい日本の標準語であつてほしい。少くも明るい「ことば」、心のやさしい、愛に満ちた「ことば」であつてほしい。

かつて英國の政府が調査した「英國に於ける英語の教育」といふ報告書の中に

Every teacher is a teacher of English because every teacher is a teacher in English.

という文句がある。これをわが國に移せばすべての學校の先生というものは、國語の先生である、なんとすれば、すべての先生は國語で教える人であるからということになる。幼稚園の保母の方の中には、専門の國語の先生というふうな方は、いない筈である。しかしどの保母の先生だつて國語で教えない先生はないのであるから、どの保母の先生もみな國語の先生ということになるのである。この事實をぜひ幼稚園の方々に考へて戴きたい。幼稚園といへば、多く施設の面、遊戯とか運動の施設のことが主だつて考へられ易いのであるが、全く何の準備も必要としないように見える「ことば」のことをしつかりと考へて戴きたいと思う。

保母の先生がみな國語の先生だからというのでみんなに立派な字を書いて戴きたいとか、名文を作つて戴きたいとか言うのではない。そういう字の上でなく、幼稚園ではすべて高聲としての言語である。話し言葉或は歌う言葉などに氣をつけて戴きたい。

一昨年あたり發表された英國ミズリー大學のカリキュラムの報告書の中に

Every teacher is a teacher of speech.

という一句があつた。すべての先生は、おはなしの先生である」ということである。これは、おもにパブリックスクールのこととして論述されていたのであるが、幼稚園の先生にとつては、最も必要なことと思われる。文字によらない話し言葉では、なんとしても、先生が模範を示すより外いたし方が

ない。どんなに深遠な理論を述べたとて、幼児にはわからなないのであるから、保母の先生は、ただよい手本を示して戴きたいのである。それが保育の最大最要のつとめであると思われる。

これまでは、幼稚園では、おはなしの上手な先生が重寶がられた。面白いおはなしをたくさん知つてゐる先生は、みんなから羨しがられた。もちろんそれが悪い筈はない。しかしこれまで、餘り多く興えることだけしか考へられなかつたのではないか。幼稚園の保母の方々は、興えることよりも、幼児のおはなしを喜んで聞くという、よき聞き手となるべきではないかと思う。人間はすべて報道の本能を持つてゐると言われてゐる。見るもの、聞くもの、なんでも、すぐ人に傳へたいという本能がある。幼児は全くその本能に動かされてゐる。「先生、先生」といつて、保母先生のところへいそいそと報告に来る幼児の話をしつかりと聞いてやつてほしいのである。よろこんで幼児の話に耳を傾けるばかりでなく、いくらでも幼児が話しをするように仕向けてほしいものである。興えるよりも、受ける方を多くしたいものと思う。そこには最も生き生きとした幼児の生活があるのであり、幼稚園全體が生きて來ると思う。歐米の教育では、特に聞き方の教育が重んぜられてゐるのは、その故であらうと思う。このことは、同時に家庭の母親にも望みたい。母親はぜひよき聞き手でありたい、幼児の話のよき聞き手であるばかりでなく、

よき娘や息子の子の話の聞き手にもなつて戴きたい。「こんなこと、お母さまに言つても駄目よ」といつて、娘が眞實を聞かせなくなつたら、それこそ大變である。「お父さまも、お母さまも駄目だけれど、叔父さまなら、聞いて下さるだろう」とか「叔母さまなら聞いて下さるだろう」というような方があれば一家はまことに幸福である。

むかしは農村などで、何かむづかしい事件が起ると「お寺の和尚さんに聞いて戴こう」といつて、山寺に出向いたわけである。何々争議といつたむづかしい事でも「お寺の和尚さんに聞いて戴かう」で、事件は平和に解決した。ところがこの頃は、こういう「聞いて戴こう」という方がなくなつたのではないかと思う。これは社會の不安を一層深めてゐるのではないかと思う。「はなしを聞く」ということは、事件を解決するということでもある。一國の中に、かういふ聞き手があれば、どんなによいかと思うと共に、自分はぜひ幼稚園の到るところにいつもニコ／＼として園児のはなしに耳を傾けて下さる保姆の方を見つきたい。多勢を集めて大勢に「ことば」を散布することだけが決して「ことば」の教育ではなく、それよりも、靜かに、幼兒の話し聲に聞き入るところに、まことの教育がある。幼兒は「ことば」を使つてそれで育つのである。そして、ときどき、先生はよい模範を興えて戴きたい。きびしい躰などと言はず、楽しく幼兒らと共に話し會つて戴きたい。それで幼兒はぐん／＼育つて行く筈である。

さて、かういうと「ことば」の教育というものが如何にも無造作のように思われるかも知れない。それは困るので、かういふことが十分できるためには、いろ／＼の準備が必要となる。準備などといえば、學生時代、修業時代のことのように思われるかも知れないが、もちろん修業中の人々に、大きな準備のあることはいうまでもないが、しかし毎日のつとめの中にも心掛が要ると思う。

岸田國士氏は「現代演劇論」の中で、俳優の心得として「刻々變遷する日常の口語體に、絶えず注意を拂うのみならず、漢文脈より歐文脈に推移する文學的表現に親しみ、あらゆる職業、教養、年配、性格を通して各種の人物に接觸し、その話し方を微細にノオトする必要があるのである。」と書いて居られる。「ことば」は生きものであるから、いつも現實の相において、しつかり把握されていなければならぬ。「刻々變遷する日常の口語體に絶えず注意を拂う」とあるが、これは教育者としても是非望ましいことであると思う。それから子供を扱うのだからいつて、輕視してはいけない。幼稚園の先生は、ぜひ文學のわかる方であつてほしい、文學がわかるということほどどんなことか、考へて見ればむづかしいことである。とにかく話の筋や内容だけに感心するのではなく「文學的表現」に親しむことが肝要であると思われる。それから、多くの職業、教養、年配、性格の人物に接觸し、その話し方を微細にノオトするといふのである。これは大變なことである。しかし俳優だけに入用なのでなく、幼兒の教育にたず

さわるものは、ぜひ一人一人の幼児の話し方に細密の注意と關心を拂つてほしい、できたら詳しくノオトするだけの熱意が欲しい。ほんやりと聞いているのではない、聞くことによつて、相手に目をひらかせるのである。

森鷗外の言葉に「人間として生れて、眼も見え、耳も聞えるのは、不具者でない以上、これは當然の話だ。だが眞の意味で、眼も見え、耳も聞える。と云う人は、ほとんど稀である。折角子供たちがこの世に生れた以上、どうかして本當の意味で、眼も見え、耳も聞えるような人間にしてやりたいものだね」ということがある由、小堀杏奴氏の近作「冬の花東」に書かれていた。まことによい言葉である。われ／＼はぜひ幼児たちに、本當に、眼も見え、耳も聞えるような人間にしてやりたいものである。

島崎藤村は、詩人として、小説家として、また隨筆家として、立派な作家であつたが、同時に藤村は童話作家としても特色のある存在であつた。藤村は童話についてこう言つてゐる。「この世の中には童話という形式でなければ表現し難いこともある。『私たちが旅から歸つて自分の家にも着くと、大人に聞かせたいことと、子供に聞かせたいと思うこと』がある。藤村のこういう言葉の意味を最近刊行された掛川俊夫という若き評論家の「島崎藤村論」には、「藤村の童話の一つの特異性としては、筋の變化よりも、日常のことの中にこもる深い意味を面白い表現で表すということであろう。ありふれたことの中に、何かの意味を新しく發見することがその童話

の本質といえる。このことは藤村がその作品の中で常に云つてゐることであるが、童話という形式を選んだのも、分り易い言葉で、事物の本質を子供に分らせようとし、子供に物を見る眼を養はしめようとしたのであろう。」とある。鷗外の言葉とも符合するようで、自分には大變うれししい諒だと思つた。幼児たちに、物を見る眼を養はしめるということくらい、大きな仕事はないと思う。童話をきかせるといふことの本質がそうであるばかりでなく、こちらが幼児の「ことば」を聞くといふことが、とりも直さず、幼児の眼を見開かせることになるのである。

權威ある者のごとく教えたという基督の姿も尊いが、それにもまして、自分には、なつかしく、また尊く感ずるのは、多くの人々の「ことば」を聞いている基督の姿である。かくて、人々は救われているのである。再びいう、幼児は「ことば」で育てられるのであると。